心身医学と Serendipity

斎藤 崇

「セレンディピティSerendipity」は自然科学上の
造語で、「偶然に、幸運に、予想外な発見をする
才能」とされる。語源はシンハラ語のセレンディ
ブ、昔のセイロン、今のスリランカの国名である。
鈴木洋二氏（世界週報、p32、1996年6月4日）
によれば、H.ウールポールが自分の科学の発見を
ベルシャの寓話にたえたのが最初だという。セ
レンディブの3人の王子が、旅に出て思いがけな
い好運から成功する物語といわれる。何かにひた
むきに取り組むうちにチャンスに出会い、それを
ものにして大成功する才能を指す。

例えば、フレミングが涙液の殺菌物質リゾチー
ムを研究中、シャーレーに誤して生えたカビの周
りにはブドウ球菌がないのをみて生育抑制物質の
存在をひらめき、ベニシリンを発見したことが有
名である。「種の起源」のダービンが、花弁から
蜜巣まで20cmもある花を観察して、20cmの口
ばしをもつ生物を予測したが、当時は嘲笑された
という。死後、キサントバン・スズメガという蛾
が発見され、蜜を吸う場面も撮影された。ケクレ
はペンゼンの構造を研究中、夢の中で長鎖の両端
がくっついた魚のような形ができて、環状構造を初
めて発見した。本邦では、湯川秀樹博士は明け方
のまどろみの夢に、研究中の中間子のヒントを得
て日本初のノーベル賞となった。

また、東京工業大学の白川英樹教授の電導性プ
ラスチックの発見もある。大学院生が、研究中に
プラスチック素材に添加物の濃度を間違えて配合
した。それも捨てずに測定すると予想外な電導物
質を発見、ノーベル賞に輝いた。

発見の重要性の大小、軽重に差はあれども、医
学に限らずもっと範囲を狭めた心身医学の領域で
もけっこうありそうである。

第44回日本心身医学会総会で、石津宏会長から
「癌と自己コントロール」と題する教育講演を依頼
された。司会の労をとられた佐々木高伸先生が打
ち合わせで、P. Norrisと（私の共同演者である）
渋谷節子先生には共通の背景がありますと述べ
られた。Serendipityであった。

Dr P. Norrisの父は、皮膚温度のバイオフィー
ドバック（BF）による自己コントロールを発見、
確立したE.グリーン博士で心身医学のMennin
ger研究所の所長である。彼女も父を追い臨床心理
に進んだ。がつくと、14歳の息子が手遅れの脳
腫瘍であった。南カルフォルニア大学でCTや
MRIで診断され、放射線療法や薬物療法も効果な
く病院から見放された。同僚の協力で自分たちに
できる努力として、BF療法や自律訓練法、リラク
セーションで息子の恐怖を和らげようとした。自
宅で母と息子はひたすら試みた。イメージ療法で
癌細胞を攻撃し、反復した。1年半後、半身不随の
息子の脱力が徐々に改善し歩歩できた。でも父親
はゲリラ掃討作戦を指示、イメージで癌細胞を探
し破壊した。復回チェックの検査を恐れて行けな
かった。息子の失神症状から検査すると石灰化の
痕跡のみであった。心身医学的な治療法で癌の
自然退縮、消失が実証された世界最初である。

渋谷先生は癌の外科医の話をもとに、看護師から
家庭に入り、持ち前の熱意で臨床心理学を勉強した。
自律訓練法による喘息治療も上手だった。心療内
科医の松田樹人副院長、肺癌専門医で心身医療の
高岡和夫先生、上司の菊池浩光臨床心理士などの
人的背景、ポジトロンCTやMRIなど最新の優
れた医療環境など、癌の心身医療のお膳だてが
とった中で、彼女のひたむきな前進が癌の自然退
縮・消失を日本で初めて可能にした。

われわれの周りにも、心身医学、心身医療の
Serendipityが隠されている。探してみませんか。